

受難節第四礼拝

2023年3月19日（日）

題 「十字架につけたのは誰か」

テキスト：ルカによる福音書23章13～25節

皆さん、おはようございます。

今日の聖書の個所はイエスがローマ総督ピラトから死刑の判決を受ける場面です。

◆死刑の判決を受ける

13:ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、

14:言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。

イエスはヘロデ王の所から再びピラトの所へ戻されて来ました。

そこでピラトは、当時のユダヤ教の最高の地位にあった祭司長や、エルサレム神殿を中心に行っていた政治家たち、また民衆を呼び集めたのです。

そしてピラトは「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。」と説明します。

続けて、ガリラヤ地方の領主であったヘロデ王の名を出して、

「15:ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。

16:だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」と言いました。

ピラトはヘロデ王がイエスを自分の所に送り返したので、イエスを罪人とみなしていないと受け止めたのです。もしヘロデ王がイエスを罪人だと認めたのであれば、ヘロデ王自身がイエスを罪人として裁くことはできたのです。ここには、権力者二人の思惑が見え隠れしています。ヘロデ王もピラトも自分で責任を取りたくはなかったということです。

さて、この時期、ユダヤでは昔の出エジプトの出来事を記念する過ぎ越しの祭りの時でした。この祭りの時には、昔から一つのルールがあったようです。

それは、

17>:祭りの度ごとに、ピラトは、囚人を一人彼らに釈放してやらなければならなかった。

（底本に節が欠けている個所の異本による訳文）

権力者の温情を見せる時でもあり、多くの民衆を支配するための道具でもあったのかもしれませんが。

しかし、そこで通常では考えられないような驚くべき大変なことが起こったのです。

18:しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。

19:このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。

人々は、ローマ総督ピラトとヘロデ王が咎めて釈放しようとしたイエスではなく、エルサレムの町で、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバの方を釈放するようにと声をあげたのです。

ちなみに、ピラトがイエスを釈放しようとしたことについては、この場面を伝えているマタイによる福音書に興味深いことが記されているのです。

マタイによる福音書27章19節P56)。

「一方、ピラトが裁判の席についているときに、妻から伝言があった。『あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分くるしめられました。』と。この妻からの伝言を聞いて、ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけたのです。

21:しかし人々は、「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫び続けた。

22:ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」

「三度」とは、『徹底的に、とことん』と言う意味です。そこまでローマ総督ピラトはイエスを釈放しようとしたのでしょうか。これは謎です。この時のピラトの心も、またガリヤラ領主ヘロデ王の心も謎です。本心はどうだったのでしょうか？

結果として、ピラトの三度のイエス釈放の声に反対するように、この場所にいたユダヤ人の民衆の声は、「イエスを十字架につけよ！」という声に集約されて行ったのです。

「23:ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。」この人々の中には、祭司長や律法学者などに扇動された人々が群衆のようになっていたと思われます。人間は顔の见えない群衆になると何を言い出すか分からないところがあるのです。普段はおとなしい人でも、人が変わったように感情にかられて叫び出すことがあるのです。

「イエスを十字架につけよと！」本当に恐ろしく、また怖い事ですがこれもわたしたちをも含めた人間世界の現実の姿の一面でもあるのではないかと思います。反対に一人の勇氣ある一人の人の声が、その場の雰囲気を変えるということもあり得るのだと思います。

「23:ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で 要求し続けた。その声はますます強くなった。」

他の聖書の訳では「その声が勝った。」と訳されています。心を打つ訳だと思えます。24:そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。

「彼らの要求をいれる」とは、彼らの意思に引き渡すと訳されます。

25:そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせたのです。

ところで、話は少し変わりますが、

ルカによる福音書の「イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。」という言葉はそこ以後の西洋の歴史の中で、「ユダヤ人がイエスを十字架につけた。」ということ的印象づけることとなってしまうようです。

その後の西洋のキリスト教世界の歴史を見ると、ユダヤ人迫害の理由の一つとして、この場面が利用されたとの見方もあります。それは、「ユダヤ人がキリストを十字架に殺した。」という宣伝、プロパガンダとしてヨーロッパで活躍していたユダヤ人差別に利用されて来たのです。そして遂には、ドイツのナチス・ヒトラーの600万人に及ぶユダヤ人大虐殺の底に流れる意識となっていたということです。

忘れてはならないのは、十字架刑はあくまで当時のローマ帝国による決定の元で行われる処刑方法であったということです。十字架刑の権限は、ユダヤ人にはなく、ローマ帝国に権限はあったのです。もし、ローマ総督ピラトが、イエスの十字架刑を本気で止めさせようとすればできたのです。彼はそれをしなかったのです。

ちなみに、この事は、10年に一度ドイツのアルプス山脈のふもとの村、オーバーアマガウの村で行われているキリスト受難劇にも暗い影響を与えました。以前お話ししたこともあります。「オーバーアマガウ・キリスト受難劇の歴史は今から約400年前の1633年に始まります。

30年戦争の間、ペストが大流行し多数の死者が出ました。その際、生き残ったオーバーアマガウの村人は「もし絶滅から免れたならば、私たちの主イエス・キリストの苦難と死と復活の劇を演じます」と誓いを立てました。1634年のペン

テコステ（聖霊降臨日）に彼らは約束をはじめて果たしました。

18 世紀中ごろにはその劇の偉大なパワーと神秘さにひかれてドイツ中からオーバーアマgauに観客が押し寄せました。今では村人4000人ほどが赤ちゃんから90代の人まで、劇や、音楽、ドアの係りなどなど様々な役割を担って劇を行っているのです。

私たちは、

2010年に観に行く機会が与えられ村人たちの演じる劇に感動しました。

ただ先の戦争の時、ドイツのナチスのヒットラーは、この劇を、ユダヤ人がキリストを十字架に殺したということで、ユダヤ人への反感そして虐殺のために利用したのです。戦後、この受難劇はユダヤ人協会からの抗議で一時ストップとなりました。その後、時間をかけて歴史の検証がなされ、十字架刑は時のローマ敵国の処刑方法であったという視点から脚本を見直すことで、再演でされることとなりました。2020年はコロナ感染で開催されませんでしたが、昨年2020年に開催されました。過去の歴史を冷静に正しく検証するという。このようなことは、現代を生きるわたしたちも知っておいて、知っておくべきことのひとつだと思われました。「十字架につけたのは誰か」

「イエスを十字架につけよ！」との罵声を浴びられ続けたイエスは、どのような気持ちだったのでしょうか？わたしたちの場合、心通わない人からであれば多少とも耐えることもできるかもしれませんが、親しかった者たちの裏切りなどは、心と魂に苦しみ・病を引き起こすこともあるでしょう。イエスはそれに耐え続けられたのです。ひたすら神に祈りつつ耐えられたのだと思います。しかし、このイエス苦難を通して、神の愛は地上に現れたのです。

今この困難な世界状況の時にこそ、神の愛を伝え、互いに愛し合う道を示され、平和と作る働きをされたイエスをしっかりと心で見て、イエスを知ることが真理である愛なる神さまを知ることになる、真のいのちに至る道であることを伝える働きを、先にイエスを知らされ知った私たちには伝える働きがあるのではないのでしょうか。難しいことかもしれませんが可能なことだと思います。わたしたちの言葉と行いでイエスを知ってもらい、ということで良いのです。働くわたしたちと共に神さまは共に働かれ、そこからいつの日が芽が出て花が咲くのだとの希望があるのです。

皆様の上に主の平安を祈ります。共に黙想しましょう。